2022年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
教育学部 子ども発達学科	准教授	虎岩　朋加
最終学歴	学　位	専門分野
State University of New York at Buffalo, Graduate School of Education, Department of Educational Leadership and Policy　修了	Ph.D. In Social Foundations	教育学 教育哲学 ジェンダー論

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

（目標）

本学建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を受けて、人の成長の過程に十全に関与し支援することのできる保育士そして幼稚園・小学校の教員に求められる総合的な力の開発に、学生各自が取り組めるよう教育活動を通じて支援する。その際、「オンリーワン」としての学生に対峙する構えをもって行う。

（方針）

（計画）

① 学生の表現力や感性、探求心などに働きかけられるように、また、学生自身が視野を拡大できるように、わかりやすく構造化され、かつやりがいのある教材を提供する。

② 様々な理由で課題を抱え学習継続に困難を感じている学生に対しては個別に丁寧な指導をおこなう。

③ 演習では、学生が所属意識をもてるような教育環境づくりをおこなう。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

教育原理、教育社会学、教育実習事前及び事後の指導（幼稚園）、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、サービス・ラーニング実習Ⅰ

（後期）

教職概論（幼・小）、教育課程論（幼・小）、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、サービス・ラーニング実習Ⅱ、教育実習Ⅰ（幼稚園）、卒業研究

○教育方法の実践

3年生の専門演習では、ジェンダーの観点から、性差別のない体育授業を文献講読から考察して学んだうえで、大学祭にてジェンダーや年齢、障害の有無にかかわらず誰もが楽しめるレクリエーション活動としてフォトオリエンテーリングを学生たちが計画して、実施した。学んだ知識を実践に統合することができた。また、ジェンダーにまつわる暴力や悩みを話し合うことのできる学習の共同体を構築することができた。

4年生の専門演習では、卒業研究の完成を目指し、授業時間のほか自主ゼミ活動も行って、文献講読、進捗状況の管理、中間発表での論文内容の批評などを行って学生が研究を進めることを確

実にできるように支援した。

基礎演習では、基礎演習担当者とのチームワークを進めて、アクティブ・ラーニングを取り入れ、ワールド・カフェ、アルファ星人、ビブリオバトルなどを実施した。大学で求められる基礎的スキル（ディスカッション、異なる視点の獲得、発表、分析、考察）などをアクティブ・ラーニングを通して得られるような授業を構成した。

支援を必要とする個別の学生に対しては、個別に学生と面談を持ち、丁寧に話を聞くなどの時間を持った。

講義においては、わかりやすく文節化され構造化された教材を作成し提示した。また、毎回の授業において、今回得た学びや質問などを学生が記入するミニッツペーパーを実施し、次の回の冒頭で、ミニッツペーパーに記載されていたことを抜粋して紹介し、質問には丁寧に答えたり、間違った理解を解説したり、コメントに対する担当教員からのフィードバックを行った。マイクロソフトフォームズでQRコードを活用して、その場で学生たちに調査を実施して、その内容を授業内容に反映させた。ワンノートに学習資料を配布して学生がPC上で資料に記載するように工夫した。討論活動、ペアワークなども取り入れた。また、動画教材を使用して、ケーススタディを行い、受講生全体を巻き込んだディスカッションも実施できた。

○作成した教科書・教材

「教育原理」「教育社会学」「教職概論」「教育課程論」いずれの講義科目においても、明快でわかりやすく構造化・文節化されたスライド教材を作成した。内容に基づいた課題も組み入れ、学生が毎回の授業で到達すべき学びを明らかにすることができた。

○自己評価

概ね達成できた。計画に掲げた通り、教材については、明快に分節化され構造化され、かつやりがいのある教材を提供できた。様々な理由で課題を抱え学習継続に困難を感じている学生に対しては個別に丁寧な指導を行った。演習では、学生が所属意識を醸成できるホームグランドになるような教育環境づくりを行うことができた。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

① 継続「多様性に配慮する包摂的教育学の構築」
② 継続「カナダ映画の人権教育への応用」
③ 継続「包摂的社会の在り方の比較研究」
④ 新規「新しいフェミニズムの教育学の構想」

○目標・計画

（目標）

① 科研「政治学との接合による規範的教育学の再構築」（分担）は最終年度に入った。本年度は「教育の生政治論」グループでは、生政治と教育との共謀について批判的に検討し、研究のまとめを行うことを目標にしている。
② 共同研究「カナダ映画の人権教育への応用」は３年目に入った。カナダ映画は多様なマイノリティを中心に据えた作品を提供してきたが、さまざまな多様性（人種・民族・性的）の交差する在り方に、カナダの多文化政策の可能性と限界が見えてくることがわかった。本年度

は多様なマイノリティの中での性的マイノリティの位置づけの表象の在り方を引き続き分析して、人権教育への応用を考察することを目標にしている。

③ 科研「Comparing governance of lesbian communities in Singapore and Japan」は、終了したが、さらに生じた研究課題を含め、日本とシンガポールで異なる社会的な条件におかれた女性たちの日常の生活の中で、統治の効果がどのように表れるのかに関して、本研究のまとめを行うことを目標にしている。

④ 新しいフェミニズムの教育学を構想する研究を行うことを目標にしている。

（計画）

① 共同研究者とともに、研究計画を具体的に策定しているので、それに沿って、国際学会での研究発表をおこなう。また、論集の一章の執筆を計画している。

② 共同研究者とともに策定した研究計画に沿って、学会での研究成果の発表をおこなう。

③ 研究協力者と共に、書籍のプロポーザルを書く計画をしている。

④ 書き進めてきた原稿を完成する。

〇2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

虎岩朋加（2021）「第６章　測定の科学と教育評価―誰が何のために測るのか」松下晴彦・伊藤彰浩・服部美奈編『教育原理を組み直す-変革の時代をこえて』名古屋大学出版会 106-122 頁

虎岩朋加（2023）「教室内での排除と差別――ジェンダー・セクシュアリティの観点から」佐藤隆之・上坂保仁編『市民を育てる道徳教育』勁草書房、109-127 頁。

（学術論文）

荒木陽子、虎岩朋加、佐藤アヤ子、岸野英美(2021)人権教育を念頭においた日加ドキュメンタリ比較 ――「カレシのおっぱい」と「ジェマのままで」が描く 乳房除去手術と性的マイノリティのありかた――」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』19 号、19-30 頁

虎岩朋加（2022）「かくれたカリキュラム、習慣、ジェンダー――プラグマティズムからのアプローチ――」『教育学研究』第 89 巻第 4 号、579-589 頁。

虎岩朋加、池田しのぶ（2022）「メディアの LGBT 主流化に見られる女性たちの位置付け――グザヴィエ・ドランの映画『私はロランス』を一事例とした考察」『カナダ文学研究』第 30 号、73-89 頁。

虎岩朋加（2022）「批判意識を育てることの意義とその困難――ベル・フックスの教育を巡る理論と民主主義――」『アメリカ教育学研究』第 33 号、東信堂。1-13 頁。

（学会発表）

荒木陽子、虎岩朋加、佐藤アヤ子、岸野英美(2021 年 9 月 11 日)「21 世紀のカナダ映画にみるマイノリティ表象―性的、人種・民族的マイノリティの交差をめぐって」日本カナダ学会第 46 回年次研究大会、オンライン開催

虎岩朋加（2021 年 10 月 23 日）「批判意識を育てることの意義とその困難――ベル・フックスの教育を巡る理論と民主主義――」アメリカ教育学会第 33 回大会公開シンポジウム

TORAIWA, T. (December 8, 2022), “Transforming Social Norms in the Classroom: Habit, Affect, and the Gender Order,” in the Panel Session “How is the critique of bio-power in education possible?,” Philosophy of Education Society of Australia 50th Annual Conference

（特許）

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

教育学会、教育哲学会、日本デューイ学会、Philosophy of Education Society、日本女性学会、日本カナダ学会、日本カナダ文学会、

○自己評価

①概ね達成できた。所属する「生政治」班では、研究進捗状況及び研究ノートを共有し、国際学会での発表を行った。

②概ね達成できた。フェミニズムの政治と性的マイノリティをめぐる政治の間に起こる葛藤をめぐる論稿を発表することができた。

③達成が不十分である。本年度は、個々の非異性愛の女性たちの日常の生活の中で、統治の効果がどのように表れるのかという本研究課題のテーマをめぐり研究のまとめをおこなうことを目標にしていたが、幼稚園実習の主担当となり、じっくり執筆に取り組むことはできなかった。書籍のプロポーザル執筆を進めたい。

④おおむね達成できた。最初ドラフトから2回修正を行った。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

学部学科、委員会などの役割を理解し、大学運営に貢献する。

（計画）

所属する学部、委員会のそれぞれの事業計画に即して、割り当てられた任務を遂行する。

○学内委員等

幼小教職課程・保育士養成部会、国際交流センター運営委員会、教務委員会

○自己評価

概ね達成できた。所属する学部や、委員会、作業部会それぞれの事業計画に即して、割り当てられた役割を理解し、遂行することができた。学科会議、教授会の議事録担当として滞りなく議事録を作成することができた。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

研究成果を教育活動に還元するとともに、社会に広く共有する。

（計画）

国内・国外での研究成果の発表により、研究成果を広く社会に共有するとともに、学会での研究交流から得た知見を教育活動に還元する。

○学会活動等

教育哲学会編集委員（2021 年 9 月～現在）

日本デューイ学会紀要編集委員会（2022 年 10 月～現在）

日本デューイ学会監査（2022 年 10 月～現在）

○地域連携・社会貢献等

新潟県人権施策懇談会委員（2020 年 4 月～現在）

NPO 法人参画プラネット実践研究所メンバー

○自己評価

概ね達成できた。新潟県人権施策懇談会委員として意見書を作成したりして、研究成果の社会への還元ができた。NPO 法人参画プラネット主催の実践研究所にもメンバーとして参加し、市民活動への研究成果還元を行うことができた。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

学会や研究会へ積極的に参加し、研究・教育へのモチベーションを維持し向上させる。

Ⅵ　総括

教育活動、地域連携・社会貢献活動については、概ね計画を達成することができた。研究活動については、一部遅れが見られるものの、共同研究では、役割と目標を遂行することができた。ライフワークとして取り組んできた、フェミニズム教育に関する原稿執筆も進捗をみて第 2 回目の修正を完成させた。2023 年度中に発表できる予定である。また、学会課題研究や一般研究発表での司会も担当して、学会活動に貢献することもできた。大学運営では、幼稚園実習の主担当として、学科の協力を得て実習の管理運営を行うことができた。サマー・フェスティバルの講師や、高大連携事業の講師、オープンキャンパス模擬授業の講師を担当して、大学の広報に貢献した。教育活動、地域連携・社会貢献活動、研究活動のいずれも、ある程度計画を達成することができ、大学教員としての役割を十分に遂行することができた。

以　上